

ジェンダーに関する講義を受講した男子大学生 のジェンダー観

—ライフストーリーに着目して—

智羽 美月

本稿は、ジェンダー平等な社会の達成に向けた男性視点の取り組みが求められるなかで、男性研究の一環として、ジェンダーに関する講義を受講した男子大学生のジェンダー観を明らかにすることを目的とする。

これまでの男性学・男性性研究は、長時間労働やワーク・ライフ・バランスなど労働に関わる問題や父親役割に関わる問題など、サラリーマン的な男性が抱える問題を男性問題として明らかにしてきた。一方、こういった企業社会に参入する以前の若年世代の男性に対する研究は、その積み重ねが十分にされているとはいえない。他方、昨今、ジェンダー問題への関心の高まりのなかでジェンダーに関する講義を開講する大学が増加しており、ジェンダーに関する講義を受講する男子大学生も同様に増加する傾向にある。本稿ではこのような現状を踏まえ、ライフストーリー調査を用い、ジェンダーに関する講義を受講した男子大学生のジェンダー観を明らかにする。なお、ライフストーリー調査は対話的構築主義に基づいて調査を実施した。

従来、男性のライフストーリー調査では、プライベートな領域における語りはあまりされない傾向にあったが、本稿では、定位家族、学校空間、出身地などプライベートな領域が中心となって語られた。インタビュー調査を通じて男子大学生がジェンダーの視点からライフストーリーを語ることは、高校や出身地など過去に所属していた社会集団のなかで形成されたジェンダー観について再考するための契機につながる事が明らかになった。

定位家族に関する語りのなかでは、父親とは相対し、母親に近い立場から家族の抱える問題が語られる傾向が見られた。これは、日頃から母親と家族の抱える問題に対して話しやすい環境にあることや、調査対象者がひとりっ子であり、家族の抱える問題に対して当事者の視点を有しやすいことが要因として挙げられる。

学校空間の視点からは、高校時代の経験とジェンダーに関する講義の受講について語られた。高校時代の語りのなかでは、例えば、男子校では教員との関係のなかで男性に対するジェンダーステレオタイプが再生産されている可能性が示唆された。また、大学で開講されるジェンダーに関する講義の受講は、ジェンダー問題に関する知識や関心を持つきっかけを提供する場となっていることがわかった。

出身地に関する語りでは、田舎出身の男子大学生の語りからジェンダー観には地域性がみられることがわかった。また、大学進学を契機とした田舎から都市部への移動はジェンダー観に影響を与えており、既存のジェンダー規範に対する批判的な視点を獲得することにつながっていた。他方、田舎出身の男子大学生は、共同体とホモソーシャルのふたつの社会集団のなかでマジョリティ男性としての優位性を意識していた。このように、田舎という空間特性が男子大学生のジェンダー観に対して影響を与えている可能性が示唆される。

ライフストーリーを語るなかではジェンダー問題に対して語る場面もみられ、既存の社会制度に対する批判的な意見や男性学・男性性研究の必要性についても言及された。しかし、ジェンダー平等のありかたについては疑問を持った語りもされている。ジェンダー平等な社会を目指すなかで、男性が今後どのように参画していくべきなのかという点については、明確になっておらず、ジェンダーに関する講義を受講した男子大学生のジェンダー観には揺らぎがあることが明らかになった。本稿の限界としては、調査対象者をジェンダーに関する講義を受講した文系の男子大学生に限定しているため、講義を受講していない男子大学生のジェンダー観については明らかになっていないことが挙げられる。

ジェンダーに関する講義を受講した男子大学生のジェンダー観にはライフステージの移行が影響を与えている。本稿では、男子大学生に着目することで、従来の男性学・男性性研究の課題であるサラリーマン的な男性像を主軸とした男性問題とは位相が異なるジェンダー観を明らかにした。したがって、今後、ジェンダーに関する講義を受講した男子大学生が、教育から労働へ所属する社会集団を変更する過程でどのようにジェンダー観が変化していくのか注視していく必要がある。男性学・男性性研究はライフステージごとのジェンダー観の変容について、世代を通じた包括的な視点から研究していくことが求められる。また、今後のジェンダー教育は大学教育だけではなく、ライフステージの移行に合わせた生涯学習としてのジェンダー学習の構築が検討される。